Great Dialogue from the
MOVIES
ジョージ校長の映画名セリフ集

[Star Wars V: The Empire Strikes Back (1980)]

"Try not. Do or do not. There is no 'try'."

「やってみるのではない。やるか、やらないか、あるのはそれだけだ！」

『Star Wars V 帝国の逆襲』(1980)はシリーズ6作品中、5番目のエピソードとして制作されたにもかかわらず2番目に発表された作品です。『Star Wars』の公開から3年後の事でした。ダース・ベイダーの支配下にある帝国はルーク・スカイウォーカー、ハン・ソロそしてレイア姫を追っていました。氷の世界に隠れている間ルークは自身の指導者であるオビ=ワンの惑星ダゴバへ行き、ジェダイマスターであるヨーダの元で訓練を受けろという助言を思い出していました。ヨーダはジェダイ騎士団を800年以上指導しており、勇敢な行為による成果よりも瞑想と反省を大事にしている強く賢い騎士でした。この台詞はヨーダが生きる中で培ってきた知恵を訓練の中でルークに授けた代表的な例です。『帝国の逆襲』はStar Warsシリーズの中で最も愛されている作品でしょう。

Star Wars V: The Empire Strikes Back (1980) was the second of the six Star Wars films to be released, even though the plot chronologically places it as the fifth episode in the sequence. The film is set three years after the original Star Wars (1977). The Empire, under the leadership of Darth Vader, is chasing Luke Skywalker, Han Solo and Princess Leia. While hiding on an icy world, Luke has a vision of his mentor, Obi-Wan Kenobi, who instructs Luke to go to the planet Dagobah to train under the diminutive Jedi master Yoda (voiced by Frank Oz). Yoda has trained Jedi Knights for over 800 years. He is a powerful and wise knight who is a powerful devotee of the Force. He prefers meditation and reflection to feats of derring-do. The line above is typical of the earthy wisdom he shares with Luke during the Jedi training. The Empire Strikes Back is perhaps the most beloved of the Star Wars series.

FRONTIER CUP · NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR&SENIOR HIGH SCHOOL

第6回フロンティアカップ 英語スピーチコンテスト

国際化が加速する現代社会では、世界共通語である
英語の力を身につけることが若い世代に求められています。
先進の国際教育を実践する名古屋国際中学校・高等学校の
ネイティブファカルティが、日本の小中学生の英語活動を応援します。

2013 8.29 thu

[時間] 9時30分～
[場所] 名古屋国際中学校・高等学校

[出場資格] 小学生の部：小学校5・6年生 課題と創作
中学生の部：中学校1～3年生 創作
（ただし、英語を母国語とする方を除きます）

学校法人栗本学園
名古屋国際 中学校 高等学校
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL
〒466-0841愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16（地下鉄御器所駅2番出口徒歩5分）
TEL 052-858-2200 FAX 052-853-5155

Feature

2月下旬に、ハーバード大学で"世界一流の学び"に触れ、学びの意欲を高める「ハーバード・MIT体験プログラム」が実施されました。アメリカの大学生と直に触れあう貴重な体験を経て帰国した3人の生徒たちが、研修の様子を振り返りながら、影響を受けたことや卒業後の進路にむけた抱負を語ってくれました。

研修の成果が学びの質を変える！
ハーバード・MIT体験プログラム報告

▲授業ではプレゼンテーションやディベートの方法について学習。3人の真剣な表情がとても印象的です。

授業スタイルや視点に、日本とアメリカの違いを実感

Times：研修を振り返って、率直な感想を聞かせてください。
吉田篤史君：約1週間の研修でしたが、到着したその日から大学の授業があり、とても内容の濃いプログラムでした。
毛利夏さん：現地では午前中に授業を受け、午後からはボストン市内の散策、寮に戻ってからは翌日の授業に向けたホームワークに取り組むという生活。たくさんのプログラムが用意されていて、のんびりとする時間はありませんでしたね。
渡辺麗来さん：本当に「スケジュールを消化していくだけで大変！」という感じでしたね（笑） でも、その分だけ毎日が充実していたと思います。
Times：出発前に楽しみにしていたハーバード大学での授業はいかがでしたか？
吉田君：あるテーマに対する自分の考えを、具体的な根拠を取り上げながら発表していくプレゼンテーションの構成術やディベートの方法について、より実践的に教わることができました。
渡辺さん：英語での議論や資料作りには難しさもありましたが、サポート役としてハーバードの学生さんが同席してくれたこともあって、最後まで諦めずやり遂げることができました。
毛利さん：私は授業の進め方に日本との違いを感じました。日本では自分の考えを発言する機会は少ないけれど、アメリカでは自分から発言しないと置いていかれる。そういう面でも、

▲研修ではハーバード大学の学生寮での生活も体験。キャンパスの大きさにも驚かされました。

とても貴重な体験になりましたね。
吉田君：そう。与えられる学びではなく、自分から積極的に学ぶ意識を持たないと授業に参加することさえできない、という雰囲気は僕も強く感じました。
渡辺さん：違いといえば、物事の捉え方や視点にも日本とアメリカの違いを感じました。例えば「リーダーシップ」について議論をする授業では、「リーダーの要素」として挙げられたキーワードの中に、これまでの自分が想像したことのないものがあったり・・・。
毛利さん：リーダーは「しっかり者」という考えしかなかったけれど、力で支配するタイプ、ルールを用いて統率するタイプなど、いろいろなリーダー像があることを知ることができ、物事に対する視点の幅を広げるという面でも、とても参考になりました。

自分の英語力の"現在地"を知り、今後のモチベーションに

▲左から／橋本啓市先生、吉田篤史君、ハーバード大学のリサさん、渡辺麗来さん、毛利夏さん

Times：英語でのコミュニケーションの手応えはいかがでしたか？
吉田君：出発前には少し自信があったのですが・・・「完全に打ちのめされた」という感じですね（笑） 特に授業では単語の内容も難しくて、思うように話すことができませんでした。
毛利さん：私も言葉の意味を理解するまでに時間がかかってしまって、テンポ良く自分の思いを伝えられなかったことが残念でした。そこは今後の課題として取り組んでいきたいと思います。
渡辺さん：ただ、こちらが理解できずにいると、先生や学生さんが分かりやすい単語に置きかえて説明してくれたので、ある意味ではボキャブラリーが増えた気もしています。会話をスムーズにさせるちょっとした口語表現なども教わることができました。
Times：大学の授業以外の時間はどのように過ごしましたか？
毛利さん：市内にある施設を見学したり、街を歩いて食事をしたりしました。個人的には「ボストンサイエンスミュージアム」で子どもたちと触れあったことが思い出です。
渡辺さん：私は「フリーダムトレイル」を散歩したこと。雪が多くて景色がきれいでした。
吉田君：僕はボストン美術館ですね。広くて全てを見られなかったので、機会があればもう一度行ってみたいです。

この貴重な体験を、それぞれの進路で活かしたい

Times：実際に使われている学生寮での生活はいかがでしたか？
渡辺さん：初めての経験で、食堂に入っただけで「映画やドラマで見た風景だ！」と感激しました（笑） いろいろな国の学生が同じ空間で生活をしていてアメリカの大学の雰囲気を、肌で感じることができました。
吉田君：ただ、実際に寮の部屋にいるのは寝る時くらいでした。授業では毎日課題が出されるので、夕食の後から10時過ぎまで、食堂のそばにある教室を使ってホームワークをしていました。
毛利さん：ホームワークの内容を元に翌日の授業が進むので、真剣に取り組まないと授業についていけず、皆真剣でした。「これほど勉強するとは予想していなかった」と思うほど、内容の濃い毎日でした。
渡辺さん：私は2人ほど英語が得意じゃないので、6年分の英語の勉強が7日間に詰まっている感じでした。実はホームワークのために徹夜した日もあったのですが、それも振り返れば良い思い出になっています。
Times：先生の目には、生徒たちの様子はどのように映りましたか？
橋本啓市先生：大学の先生や学生さんの親切さに応えようという姿勢が感じられ、3人とも本当に頑張っていました。1週間という限られた期間ということで、今回はさまざまなことをインプットする時間だったと思いますので、卒業後のそれぞれの舞台でぜひ今回の経験をアウトプットしていってほしいですね。
Times：最後に今後の抱負を聞かせてください。
毛利さん：海外の大学へ進学するにあたって、今回の研修はとても良い刺激になりました。自分の意見を言えるように、しっかりと準備をしていきたいです。
吉田君：研修を通じて自分の意志を相手に伝えることの大切さや難しさを再確認しました。大学ではこれまで以上にコミュニケーション能力に磨きをかけていきたいです。
渡辺さん：私は音楽大学に進むのですが、英語でたくさんの人とのつながりができた研修の経験を活かして、音楽を通して積極的に自分を表現して、これからも多くの人とつながりを作っていきたいと思います。

▲2時間の授業を終えた午後からはボストン市内を散策。たくさんの思い出ができました。

THE FRONTIER TIMES
Report

名古屋大学合格という目標を達成した先輩からの応援メッセージ。

4月に名古屋大学に進学した第5期生の永井一輝君。名古屋国際中学校・高等学校で過ごした6年間を振り返り、後輩たちにメッセージを送ってくれました。

中1から揺るがなかった「名古屋大学合格」という目標

私は4月から名古屋大学の情報文化学部で学んでいます。情報文化学部というのは、幅広い分野の知識を身につけられる、好奇心旺盛な自分にピッタリの学部。もともと関心のあった法学や政治学だけでなく、いろいろな分野ついて貪欲に学ぼうと、期待を胸に充実した大学生活を送っています。また、名古屋国際中学校・高等学校から名古屋大学へ進学したのは私が初めてなので、後輩の良い見本となれるようどんなことにもチャレンジして、自分の経験を伝えていければと思っています。

名古屋大学に進学しようと決意したのは、中学に入学して間もない頃でした。家族の方針で愛知県内にある大学へ進むことが決まっていたため、「それならば愛知県で一番の大学を目指そう」と思い、友だちや先生との会話でも「名古屋大学に行く」と公言していました。6年間、その決意は一度も揺るぎませんでしたね。大学受験では勉強面はもちろん、学部選択や日常の何気ない相談など、先生方には本当にお世話になりました。そのサポートに「合格」という形で応えることができ、とても嬉しく思っています。

▲中高一貫課程第5期生の永井一輝君。現在は名古屋大学情報文化学部に在学中。

先生との会話が、幅広い興味を引き出してくれた

名古屋国際中学校・高等学校での6年間には、数えきれないほどの楽しい思い出があります。なかでも、授業を離れた場で先生方とたくさんの話ができたことは、今も強く心に残っています。先生方の大学時代について、趣味について、豊富な経験をもとにした話はとても興味深く、いつも時間を忘れて話を聞かせていただきました。振り返ると、私はそうした先生とのコミュニケーションを通して視野を広げ、現在の進路につながる多様な興味を引き出していただいたのだと感じています。この学校には国籍も専門分野もさまざまな先生方がたくさんいるので、後輩たちにはその環境を自ら積極的に活かして、将来の目標を見つけるきっかけにしてほしいですね。また、視野を広げるという点でもたくさんの機会が用意されていました。イングリッシュキャンプ、ロンドンでの語学研修、国際理解研修、光楓祭、スピーチコンテストなど、先生方からたくさんの"チャンス"を与えられ、参加するたびに新しい目標を見つけることができました。生徒一人ひとりの個性を尊重し、可能性を伸ばすための機会が与えられること。この素晴らしい環境こそ、名古屋国際中学校・高等学校の魅力だと、卒業生として胸を張って言うことができます。目標だった名古屋大学に合格できたことだけでなく、名古屋国際で過ごした6年間は、一人の人間としても成長することができた時間でした。

私にとって最も大きな変化だったのは、自分に自信が持てるようになったこと。転機となったのは6年生の『光楓祭』です。実行委員長として全校生徒をまとめなければならない立場になり、その中で人と人とのコミュニケーションの大切さについて身をもって実感し、以前よりも相手のことを考えて行動することができるようになりました。また、後輩との交流が増えたことで「自分は人に教えることが好きなんだ」という、自分の新たな可能性を発見できたこともとても大きかったですね。このように後輩から先輩へと、学年を重ねるごとに違った立場や役割が生まれ、6年を通じて成長できることは中高一貫校ならではの魅力だと思います。卒業後も慕ってくれる後輩の存在は、大学生となった今も大きな励みになっています。名古屋大学と名古屋国際中学校・高等学校は距離的にもすぐ近くなので、少しでも自分の経験を伝えられるよう、母校に戻って後輩たちをサポートしていければと考えています。良いアドバイスができるよう、充実した大学生活を送りたいですね。